



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
センター長 大串 隆之

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga, 520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

— 目 次 —

研究の「価格」と「価値」	大串隆之..... 1	セミナー参加レポート..... 10	
2006・2007年度協力研究員追加リスト..... 2		センター員の研究紹介	山内 淳..... 14
公募型共同利用事業 野外実習の報告			Arnt Telschow..... 15
「菌学若手の会の研究集会」..... 3		センターを去るにあたって	釘宮聡一 18
「里山の生物多様性・人と里山との関わり」..... 5			長 泰行..... 19
「土壌ダニセミナー」..... 6		センター員の異動..... 20	
オープンキャンパス報告..... 8		編集後記..... 20	
生態研ライブラリーの紹介..... 9			



研究の「価格」と「価値」
大串隆之（京都大学生態学研究センター長）



人類を、哲学、つまり、自然のさまざまな現象を結合している隠された関連を解明しようとする科学の、研究に駆り立てる第一原理は、その発見から得られる何らかの利益ではなく、驚異である。

アダム・スミス「天文学史」（1795）

国立大学が法人化されてはや3年が過ぎようとしている。中期目標期間の半ばを折り返し、来年度には早くも暫定評価の準備に取り掛からねばならない。法人化後のこの3年間を振り返ってみると、研究の「価値」に対する捉え方が変わりつつあることが気掛かりである。科学技術創造立国を目指すわが国の科学技術政策に基づいて、従来の科学研究費に加えて、科学技術振興調整費を始めとするさまざまな大型の競争的資金が誕生した。このような大型のプロジェクトは往々にして短期的な目に見える経済的効果、技術革新、イノベーションが期待されている。一方、国立大学法人の運営費交付金は毎年削

減が続く中、何はさておき、競争的資金の獲得の必要性が声高に叫ばれている。むろん研究資金は研究の基盤を支えるリソースであり、獲得の努力を惜しむものではない。このような背景に呼応するように、競争的資金の獲得が研究の活性度を測る一つの指標として導入され始めた。ここで指摘したいことは、「競争的資金の獲得」が本来の「研究の活性度」を反映するののかということである。

研究業績が「カネ」によって決まるとは誰しも思っていない。このため、競争的資金の額で表される研究の「価格」は、かならずしも研究の「価値」を表すものではない。また、「競争的」資金という言葉は、多額の研究資金を稼ぐ「競争」という誤解を与えかねない。これら大型の競争的資金を獲得するための申請書の作成には、しばしば膨大な時間が費やされる。このため、ようやく申請が採択された暁には、あたかも目的を達成してしまったような錯覚に陥ってしまう。ようやく我に返った時には、

次の申請書の作成が始まっている。学問の本来の目的は、未来可能性を保証するために多様かつ独創的な見方を数多く提供することである。研究者が評価されるのは、「どれだけ多額の競争的資金を稼いだか」という「研究の価格」によってではなく、「いかに素晴らしい研究を成し遂げたか」という「研究の価値」によってである。研究費の獲得競争に組み込まれてしまうと、その目標は最大限の資金を稼ぐことになる。稼げば稼ぐほど評価が高まるはずという強迫観念に捕われるからだ。大型の競争的資金を獲得することを生き甲斐としてはばからない研究者もいるという。また、それを良しとする風潮も一部にある。今の日本の社会に蔓延している「拝金主義」の考え方に驚くほど似ている。科学・技術の分野は、世間より遅れて「バブルの恩恵」を受けているが、過去そうだったように「拝金主義」の考え方に急速に染まりかねないという危惧がある。研究の中身を十分に問わない競争的資金のリストアップによる研究活性度の評価は、このような考え方を助長するものではないか。これでは、競争的資金の獲得実績ではなく、研究の内容を十分に評価し、その独創性を見抜く力のある「目利き」が育たない。

研究資金と研究資金あたりの研究業績(論文や著書の数)の関係を調べてみると、以下のようなパターンが顕著に見られる。(1)初期の研究資金が増えるとしばらくは研究業績の増加が見られるが、(2)そのうちに頭打ちになる。ここがコストパフォーマンスから見た最適投資額であり、(3)さらに資金を投資すると、研究資金あたりの研究活性度は低下してしまう。この最適投資額はどれも一律というわけではなく、研究分野によって異なるだろう。しかし、ここで指摘した研究資金と研究業績の関係は同じだ。この最適値を超えてしまうと、いくら資金をつぎ込んででも研究業績は上がらないばかりか、逆に、低下を招いてしまう。大事なことは、それぞれの研究分野における最適投資額の見極めだ。研究資金の獲得競争では、この最適値は意味を持たなくなる。研究資金を最大限に稼ごうとするからだ。これは税金の無駄遣いにほかならない。繰り返すが、問題点は、研究資金の獲得があたかも優れた研究業績であるかのような錯覚である。そのために厳格な評価があるのだという声が聞こえてくるが、その評価は必ずしも当てにならない。特に、大型

の競争的資金は重点分野の特定の課題に割り振られることが多いため、審査には即効的な経済的価値という「モノサシ」が幅を利かす。

京大では、湯川・朝永生誕100周年にあたり、昨年来さまざまな記念事業が企画されている。ノーベル賞の対象となった湯川博士の「新粒子」仮説に対して当時の学会の反応は冷たいものであった。これは何も湯川博士に限ったことではない。多くのノーベル賞受賞者の対象となった優れた研究は、当時の学会では相手にされなかったものが多い。これは至極当然で、独創的であるがゆえにその価値を正当に測るモノサシがなかったからだ。われわれの世界観を大きく変えうる独創的な研究は、今風の「競争的」資金を決して獲得できなかっただろう。大型の競争的資金の申請は、「やや古びたフツの考え方」によって審査されることが多い。知の地平を切り開く独創的な考え方は「フツの考え方」では評価できないのは当たり前である。多くの研究者が研究資金を獲得しやすい研究課題に殺到してしまうと、研究においてもっとも大切なものの見方の多様性が損なわれ、未来可能性を保証する独創的な研究の芽を摘んでしまいかねない。経済的価値を測ることを得意とする「価格」というモノサシにとって、独創的な考え方に根ざした学問の「価値」を測ることはもっとも不得手である。学問の多様性は、この世界を多面的に評価するためのさまざまな「モノサシ」を提供する根源である。多様なモノサシによって、われわれはこれまで知ることがなかった世界の新しい姿に目を見張るのである。

最近、研究成果の捏造がしばしば報道されている。科学に対する信頼を揺るがしかねない由々しき背信行為である。しかし、その背景には捏造してでも研究資金の獲得競争に勝ち残りたいという「あせり」があるのではないか。目先の利益に翻弄されて、研究の目的を見失ってしまった主体性なき研究者の姿が見える。優れた研究とは、「人を感動させる」研究のことだ。人を感動させるということは、「研究資金の多寡で研究を測る」という価値観さえも変えてしまう大きな力を持っている。様々な角度から未知の世界を測る多様な「モノサシ」を創り出すのが科学の使命である。研究の「価値」はこれにつきる。

2006・2007年度京大生態学研究センター協力研究員 (Affiliated Scientist) 追加リスト

氏名	所属	研究課題
石川俊之	滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター	琵琶湖生態系の長期変化の解析
竹内一郎	愛媛大学農学部	浅海域生態系の環境保全に関する研究
小北智之	福井県立大学生物資源学部	魚類の局所適応に関する進化生態・進化遺伝学的研究
鏡味麻衣子	東邦大学理学部	琵琶湖の植物プランクトン及びそれに寄生するツボカビの動態解析